

多紀雲従門人録について

矢 数 道 明

はじめに

『漢洋医学闘争史』（昭和七年十一月十日発行）の著者深川農堂氏が、昭和十二年二月以降のこと、東京を去るとき、知人に托した蒐集資料の中に、多紀元堅とその長男元琰（号雲従）の二人の門人録があった。昭和四十三年頃、その資料は文京区の医師平野啓司氏の保管に属していたが、筆者はあたかも『明治百年漢方略史年表』の作成の必要に迫られ、安西安周氏の紹介状を携えて平野氏を訪問したところ、平野氏は直ちに、この資料は君が十分活用して欲しいと快諾され、即刻これを譲り受けることができた。

この資料の中にはいろいろ未完成、未発表の草稿があり、筆者はこれを基にして追加を行い、「深川農堂氏資料の中から」として、いくつかの報告をまとめて『漢方の臨牀』誌に発表した。いまそのいくつかを挙げてみると、(一)「北総の名医、石原吾道伝」、(二)「林静斎『経歴漫誌』抄」、(三)「京都跡尋社長吉益鉄太郎伝」、(四)「尾州の名医、村瀬豆洲翁を偲んで」などで、みな深川農堂資料の中から拾い出し、手を加えて蘇生させたものであった。そしてそれ以外の資料は、永い間古びた布呂敷包みにつつまれたままとなっていた。

先頃、真柳誠氏が、筆者の書庫温知堂蔵書目録を作成するため、深川資料未調査の部分を開いてみたところ、いくつか

多紀氏孺人益田氏墓

(二代元瑛、元堅の長男)

雲從劉先生之墓

明治九年一月四日卒 五十三歳

字希温 義春院法印
幕府侍医兼医学教諭御匙

多紀氏孺人沢山氏墓

(初代元堅、元簡の五男)

江戸侍医法印尚薬兼医学教諭

蒞庭多紀先生墓

安政四年二月十四日卒 六十三歳

日本橋矢の倉に邸を賜り分家す
諱元堅、又亦柔、名安叔、号蒞庭、存誠堂
家斉、家慶將軍の侍医御匙
樂真院法印また樂春院

(元瑛の次男)

多紀晴之助墓

大正六年十一月五日 六十二歳

多紀保之助之墓

昭和十三年九月二十日

(多紀英樹氏祖母の父)
故藤丸正蔵之墓

著述

- 傷寒広要 ○薬治通義
- 雑病広要 ○名医臈論
- 素問紹識 ○女科広要
- 金匱述義 ○傷寒論述義
- 時選読我書 ○同統録
- △備急千金要方の校刊
- △医心方の校刊

多紀崇徳之墓

昭和四十三年二月四日

七十三歳没

(元瑛の長男安志)
丹波明之墓

図1 分家多紀矢の倉家の墓城図(城官寺)

の貴重な文献が埋没していたことが判った。その一つは、深川氏が『漢洋医学闘争史』編纂中、木村濟世塾の蔵書の中にあつたと思われる吉益南涯・北洲・復軒の三代の門人録と、多紀元堅・雲從父子の門人録の筆写本が未調査のままとなつていた。深川氏は恐らく木村長久氏と協力し、後世に伝えるべく、新しく上等の和紙に朱線で記載項目を詳細に分割し、中央の柱に木村濟世塾保存という字句を刻し、吉益三代と多紀二代の門人録を完成保存させるべく、深川氏自筆による雄渾な墨書を以て、門人の氏名・入門時の年齢・入門年代・出身地・紹介者などを記入してあつた。他にも重要事項が記録されているところもあり、これだけで立派な門人録の写しとして、十分貴重なものであつた。よつてこれを「木村濟世塾旧蔵深川本」と命名した。

ここでは「中野操先生追悼号論文」とし

て、多紀雲従門人録を選び、門人録と共に、雲従とその門人石原吾道についての記録を、追記してみたいと思うものである。

一 多紀雲従の略伝と家系

森潤三郎著『多紀氏の事蹟』によると、多紀雲従の略歴は次の如くである（西紀と墓は筆者追記）。

「元琰字は希温、雲従と号す。幼名は銓之助、長じて安琢と称す。文政七年（一八二四）に生れ、天保十三年（一八四二）三月十五日、十九歳で初めて將軍家慶に謁見し、安政四年（一八五七）五月四日家督を相続、この年奥医師に任ぜられ、十二月十六日法眼に叙せられ、文久元年（一八六一）十二月十六日、叔父元倍と同時に法印に昇叙し、養春院と称した。同二年十月二日、明年二月將軍上洛の節御供を命ぜられ、三年正月二十五日御供出立の日割を発表して、奥医師・奥詣医師は二月十日と定められ、二月十三日將軍出立まで異事もないから、定めの日に出立したことであろう。その後病を以て奥医師を辞して寄合に入ったのは何日か分からぬが、元治元年（一八六四）再び奥医師に任ぜられて、和宮の御匙となり、慶応二年（一八六六）將軍家茂が毛利家征討の爲め大阪に在って病むや、元琰命を奉じて大阪に赴き、治療のことに従い、薨去の後江戸に帰った。明治維新後は市中患者の治療に従事し、また浅田宗伯と毎月三回横浜に赴き、同地の患者を診察し、明治九年（一八七六）一月四日卒す。年五十三、法号を養春院隆述雲従居士という。東京都北区上中里、真義真言宗豊山派城官寺に葬られた。」

元矢の倉の分家多紀家系図と墓域図（図一）を略記すると次の如くである。

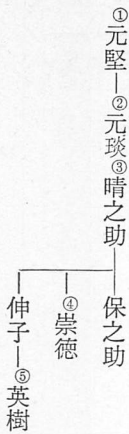




図 3 若き日の石原吾道の写真
(石原正次氏蔵)

姓名		石原吾道		本村講生塾修習	
生年		天保十五年		北総北辺村	
没年					
生所		北総北辺村			
没所					
門		多紀雲從門			
師		多紀雲從			
門人		石原正次			
備考					
その他					

図 2 『多紀雲從門人録』の石原吾道の頁

筆者は昭和二十九年（一九五四）の頃、崇徳氏及び夫人と知遇を得、夫人の診治に当り、多紀家のことにつき種々教えを受けたことがある。

二 雲從と門人石原吾道のこと

『多紀雲從門人録』の第一七六番目に、石原吾道の名がある（図2）。石原吾道（図3）は幼名を蘇彦といい、安政六年（一八五九）十四歳のとき大志を抱いて無一物で江戸に出で、海保漁村の塾に入って苦学し、翌安政六年（一八六〇）十五歳のとき、多紀雲從の門に入った。吾道の父安彦は多紀元堅の門に学んだ。吾道の生地は千葉県、北総北辺田村で、後継者は石原正次と記録されている。

筆者は前述の如く、嘗て石原吾道伝を深川農堂資料によって調査を進め、その生地北辺田村の旧家を訪ね、嗣子正次氏を千葉市に訪問し、いろいろ貴重な資料を借用、「北総の名医、石原吾道伝」を草して『漢方の臨牀』誌十六卷九号に発表し、『漢方治療百話』第三集叢談編に収録してある。

石原吾道は多紀雲從に師事すること六年半、郷里にあっては梅毒皮膚病専門家として全国的に名声があったが、そればかり

暴瀉病治驗

此病有言人之所病者多而
醫之所治者少

醫部桂
佐久間安記

瀉病ヲ以テ難ナル者暴瀉病ノ難ナル時也醫者ヲ暴瀉病ヲ以テ難トナス余潜ニ之ヲ疑フ余師雲從北必風ヲ其症ヲ審ニシ其治方ヲ謀シ凡テ一匙ニ四ス門下答其方ヲ改ク世醫ニテ難治ト稱スルハ蓋シ其術ヲ精究セサルニ據ルナラン矣夫コレヲ病タル者暴瀉トテ吐テ糞ス然ル

図 4 石原吾道著『(観冥葉室) 暴瀉病治驗』

でなく、雲従と同じく古方の立場より一般の治療にも秀で、特にコレラの治療に当っては独自の新生面を開拓している。『和漢医林新誌』八二号、明治十九年(一八八六)七月八日号より三回にわたって、鈴木精庵(門人番号八七)が「古呂利病篇」「多紀雲従先生遺説」と題したものを連載している。また石原吾道は師雲従の説に従い、明治二十年(一八八七)流行時のコレラの診断と治療方針を詳述し、『観冥葉室暴瀉病治驗』(石原正次氏蔵、図4)を著している。

いて、「暴瀉病(コレラ)に対する石原吾道の治驗録」と題してその大綱を発表したが、学会誌への掲載は果たさなかつた。

従来の医史書によると、漢方が衰亡した最大の原因は、コレラの治療に対して全く無能であったからといわれていた。いま雲従と吾道の治療大綱をみると、その本態は実熱の陽証で、外観は虚寒陰証に見えるが、これは全く真熱假寒の証で、大黃・芒硝・石膏を以て大いに熱を攻むべしというのである。雲従と吾道の説とところの大綱を要約してみると次の如くである。

コレラの病態と処方指示判定法

(一)コレラの病態は熱毒の甚だしいもので、『素問』にいう「暴注下迫皆熱に属す」に該当し、その脈の伏するのは、張介賓のいう「火閉じて伏す、霍乱は伏して閉結す」に相当している。

(二)外証は一見すると、厥陰病の四逆湯類の如く思われるが、その実体は熱厥で、真熱假寒の代表的なものである。それ故人参・附子などの温熱剤や、洋薬の阿片の如き下利遏止の剤は禁忌で、白虎湯や大承気湯など、石膏・大黃の剤を用いる。

(三)その症状は、脈沈伏、吐瀉清水、冷汗煩躁、四肢厥逆にも拘わらず、(1)大渴して冷水を引飲し、(2)吐物は熱湯の如く、(3)胸腹中熱感があり、(4)衣を近づくるを欲せず、(5)舌苔黃黒乾燥し、(6)大黃・芒硝により燥屎結糞を下すときは、諸症軽快す。これ即ち熱厥の「証」である。また腹痛なく清水を下し、尿の色黄色、十指紫色(チアノーゼ)を示す。

明治二十年(一八八七)にコレラが流行したとき、石原吾道が治療をした七〇症例中、死亡したのは僅かに六例で、用いた処方別をみると、大柴胡湯加芒硝・石膏(二四人)、竹葉石膏湯(二三人)、小半夏加茯苓合甘連石膏湯(二三人)、大承気湯(又は丸)(二〇人)、四苓解毒湯(二〇人)、真性の陰証もあるが少なく附子理中湯(僅かに四人)であった。

三 雲従門人録

偉才多紀元堅の後嗣として、法眼、法印と順調に昇進したが、あたかも明治維新に遭遇し、矢の倉多紀家は二代を以て御匙の職より離れた。しかし元堅・雲従の二人の門人録(深川本)によれば、元堅は安永二年(一七七三)〜文化三年(一八〇六)までの三十三年間に、八七六人の門人があり、寛政十三年(一八〇一)がもっとも多く、一年間に八十三名の入門者があった。元堅の入門者の年平均は二六・五人である。雲従は嘉永三年(一八五〇)二十六歳のときより、万延元年(一八六〇)三十六歳の十年間に、一九五人の入門者があった。嘉永三年(一八五〇)がもっとも多く、一年間に七十九人の新入門者を抱えることとなった。年間平均は一六・二人である。

これらの記録をみると、本門人録はその全員の記録ではなく、年代に限定された一部分であるようである。以下木村濟世塾旧蔵本、多紀雲従門人録深川本により転載する。

多紀雲從門

18	鷹野 甫春 (壽)	嘉永三	新発田藩	19	金子 淳庵 之丞 入門當時北村助	嘉永三	江戸深川住
17	相川 善輔	嘉永三	龜井隠岐守藩	20	生田 良温	嘉永三	内藤能発守藩
16	玉井 幽玄	永三	新発田藩	21	貝 新藏	嘉永三	延岡藩
15	小林 龍仙	嘉永三	江戸浅草山谷宿	22	柏原敬次郎 信次郎	嘉永三	鶴岡藩
14	速水 貞玄	嘉永三	新発田藩	23	高根 秀庵	嘉永三	高知藩
13	赤堀 通珉	永三	姫路藩	24	楠瀬 春同 (壽)	嘉永三	越後寺社村
12	弓削 正廸	嘉永三	濃州大野郡清永村	25	久志本主水 (壽)	嘉永三	米沢藩
11	相沢 周碩	永三	松平和泉守藩	26	小菅 俊丈	嘉永三	桑名藩
10	杉全 謙初 土山榮助男	永三	黒田甲斐守内	27	伊東 治庵 後改元之	嘉永三	安藤長門守藩
9	土山 精菴	永三	米倉大蔵組	28	島貫 元光	嘉永三	仙台藩
8	五十嵐 龍仙	永三	会津	29	松井 玄恭	嘉永三	仙台藩
7	増田 道策	嘉永三	奥州黒石藩	30	井上 鼎策	嘉永三	仙台藩
6	糟谷 修平	嘉永三	上総吉野	31	榎森 秀庵	嘉永三	仙台藩
5	折茂 三省	永三	上州西平井村	32	草鹿三千松	嘉永三	松平備後守藩
4	関口 貞菴 改姓 瀬川	永三	水戸玉造村	33	上野 祐益	嘉永三	盛岡藩
3	鶉沢 泰順	永三	上総	34	宮崎 玄厚	嘉永三	越中高野郷
2	北見 順從	永三	松平志摩守内	35	小川 養運 後改昌庵	嘉永三	姫路藩
1	越川 良安	永三	西尾隠岐守内	36	鈴木 淡齋	嘉永三	江戸浅草
	氏 名	入門年月	入門當時の住所	37	角南 将監	嘉永三	松平丹波守藩
				38	山内 順貞	嘉永三	新発田藩
				39	小川 草筵	嘉永三	仙台藩
				40	近藤 昌碩	嘉永三	沼田藩
				41	中村 道允	嘉永三	大洲藩
				42	石田 宗順	嘉永三	下総新里村
				43	岡野 仙策	嘉永三	能州羽咋郡宿村
				44	小川 玄節	嘉永三	越後片貝村
				45	坂本 玄格	嘉永三	
				46	伊東 宗節	嘉永三	
				47	白鳥 彝齋	嘉永三	
				48	溝部 有謙	嘉永三	松平下総守藩
				49	鷹取 尚敬	嘉永三	津藩
				50	祐乘坊庸軒	嘉永三	沼津藩
				51	杏 良節	嘉永三	園部藩
				52	新井 玄盛	嘉永三	
				53	高橋 玄純	嘉永三	
				54	大沼 抛斎	嘉永三	羽州最上若松
				55	清水 玄龍	嘉永三	関宿藩
				56	土田 三順	嘉永三	成瀬隼人正家
				57	石井 仁節	嘉永三	

76	森元 高伯	嘉永三	薩州藩	77	志々目 猷吉	嘉永三	薩州藩
75	結城 中正	嘉永三	一ノ関藩	78	湯前 龍春	嘉永三	薩州藩
74	羽生 良伯	嘉永三	松平和泉守藩	79	大浦 玄栄	嘉永三	
73	西島盛之助	嘉永三	藩	80	屋代 尚碩	嘉永六	川越藩
72	小島 元養	嘉永三	中川修理大夫	81	黒川 雲岱	嘉永六	松平周防守藩
71	志賀 元周	嘉永三	酒井雅楽守藩	82	半田 文明	嘉永六	沼津
70	甲田 頭二	嘉永三	野州河内郡本	83	東 霞艇	嘉永六	大仏御殿内
69	笠原 求意	嘉永三	高知藩	84	服部 復庵	嘉永六	江戸
68	大須賀見栄	嘉永三	肥前佐賀藩	85	町田 道本	嘉永六	佐土原藩
67	馬島 禎	嘉永三	江戸下谷広小路	86	松田 晋庵	嘉永六	新発田藩
66	小野寺玄卓	嘉永三	一ノ関	87	鈴木 精庵	嘉永六	下総二合半村
65	加川 謙助	嘉永三	小諸藩	88	宮田 泰伯	嘉永六	高田
64	山本 元悦	嘉永三	土浦藩	89	福田清兵衛	嘉永六	佐賀藩
63	小平 翁輔	嘉永三	野州安蘇郡上	90	沢野 元育	嘉永六	佐賀藩
62	窪田 文瑾	嘉永三	津輕青森	91	原田 玄龍	嘉永六	佐賀藩
61	三浦 玄亭	嘉永三	米沢池黒村	92	西 永喜	嘉永六	柳川藩
60	舟山 養源	嘉永三	河内島泉林	93	鈴木 寿伯	嘉永六	米沢越中守藩
59	越尾 淳蔵	嘉永三	河内島泉林	94	深尾 玄隆	嘉永六	高知藩
58	戸井田鶴庵	嘉永三	河内島泉林	95	今 春碩	嘉永六	津輕藩
				96	権藤 真	嘉永六	久留米藩
				97	松井 了元	嘉永六	仙台藩
				98	片山 松庵	嘉永六	新発田藩
				99	長野 元晋	嘉永六	薩州藩
				100	杉本 文菴	嘉永六	秋元但馬守藩
				101	大津 行言	嘉永六	新発田藩
				102	河村 秀民	嘉永六	白杵藩
				103	安堵 啓益	嘉永六	高松藩
				104	清水 道宝	嘉永六	柳川藩
				105	戸上 元達	嘉永六	柳川藩
				106	稲垣 菜庵	嘉永六	新発田藩
				107	武 回庵	嘉永六	長岡藩
				108	竹前 玄二	嘉永六	信州高井郡米子
				109	松村 徳菴	嘉永六	紀州藩
				110	島村 修菴	嘉永六	江戸
				111	島村 泰庵	嘉永六	江戸
				112	上原 仲発	嘉永六	信州松本滝沢村
				113	片瀬繁次郎	安政元	信州松本滝沢村
				114	渋木 春沢	安政二	越後長岡
				115	山口 欣水	安政二	薩州肝付右門臣
				116	寺田 元悦	安政二	下総取手宿
				117	宇津 三省	安政二	下野高根沢
				118	早野 道壽	安政二	白杵藩
				119	相庭 順泰	安政二	生駒大蔵内

137	大森 良園	安政三	石川主殿臣	156	櫻田 玄叔	安政三	大聖寺藩	176	石原 吾道	安政六	北総北辺田村
	<small>良園本名ハ今野 熊ノ助ト云フ 仙台葦原ノ佐</small>			155	朝稲 三碩	安政十三	薩州藩		<small>幼祖 彦修 彦珍</small>		
136	今田 耕平	安政三	津屋村	154	横山 蕙意	安政三	川越藩	175	赤松 元礼	安政六	下総川尻村
	<small>後改 成采 破 門</small>			153	坂本 良民	安政三	江戸西川岸		<small>始 富田主領ト稱ス</small>		加賀藩横山藏
135	山田 玄益	安政三	土浦藩	152	野口 彦叔	安政三	総州北羽鳥村	174	鹿野 得三	安政六	逸見因幡守臣
	<small>入門年二十三</small>			151	倉俣 生白	安政三	板倉内膳正内	173	小野 尚友	安政六	盛岡藩
134	杉山 謙順	安政三	井野村	150	上村 隆庵	安政三	薩州藩	172	桂 文哉	安政五	大村藩
	<small>相州高座郡龜</small>			149	横地 碩淳	安政三	福岡藩	171	中村 巖亭	安政五	大村藩
133	寛 玄庵	安政三	高田藩	148	市川 文友	安政三	江戸同朋町	169	副島 伯猷	安政五	佐賀藩
132	西村 隆運	安政三	小田原藩	147	石橋 泰珉	安政二十	三窓村	168	石川 隆意	安政五	庄内藩
131	寺田 宗碩	安政三	下総取手駅	146	陶山 俊亮	安政十九	佐賀藩	167	進藤 永策	安政五	津軽尾崎村
130	橋田 栄軒	安政三	江戸大伝馬街	145	岡井 尚綱	安政二十六	盛岡藩	166	須天 道順	安政五	松平摂津守門
129	柳田 良三	安政三		144	湯本 左衛	安政三十二	上州吾妻郡赤岩村	165	伊東 貞頼	安政五十四	薩藩町田監物
128	加藤 三熊	安政三	姫路藩	143	荒井 良意	安政三十二	会津藩	164	福原 良庵	安政十四	備前藩
127	高橋 辰斎	安政三	姫路藩	142	高橋 壽繁	安政三十三	仙台後藤孫兵衛臣	163	清水 東長	安政十四	諏訪藩
126	大浦 柳溪	安政三	古河藩	141	長谷川 順菴	安政三十八		162	加賀山 宗純	安政四年	会津藩
	<small>町 屋松庵トモ云フ</small>			140	松浦 玄英	安政三十八		161	工藤 玄壽	安政三	盛岡藩
125	熱田 松庵	安政二	浅草蔵前町	139	小笠原 友悦	安政三	盛岡領	159	坂 民部	安政十二	泉州藩
124	巖田 鼎三	安政二	加州	138	佐藤 元章	安政三	仙台玄仙郡	158	向井 橘甫	安政十二	江戶
123	坂上 玄丈	安政二	浅草諏訪町	137	幼名 愛蔵 元侍 政三	主殿守ニ仕ル		157	中山 玄鉄	安政三	土屋采女正藩
122	中台 元倫	安政二	庄内藩	136	佐藤 元章	安政三		156	向井 橘甫	安政十二	
121	神田 寛斎	安政二	圭州弱郡中山村	135	松浦 玄英	安政三		155	工藤 玄壽	安政三	
				134	長谷川 順菴	安政三十八		154	加賀山 宗純	安政四年	
				133	高橋 壽繁	安政三十三		153	清水 東長	安政十四	
				132	湯本 左衛	安政三十二		152	福原 良庵	安政十四	
				131	荒井 良意	安政三十二		151	加賀山 宗純	安政四年	
				130	岡井 尚綱	安政二十六		150	工藤 玄壽	安政三	
				129	陶山 俊亮	安政十九		149	坂 民部	安政十二	
				128	石橋 泰珉	安政十九		148	向井 橘甫	安政十二	
				127	岡井 尚綱	安政二十六		147	工藤 玄壽	安政三	
				126	湯本 左衛	安政三十二		146	加賀山 宗純	安政四年	
				125	荒井 良意	安政三十二		145	清水 東長	安政十四	
				124	岡井 尚綱	安政二十六		144	福原 良庵	安政十四	
				123	陶山 俊亮	安政十九		143	加賀山 宗純	安政四年	
				122	石橋 泰珉	安政十九		142	清水 東長	安政十四	
				121	岡井 尚綱	安政二十六		141	福原 良庵	安政十四	
				120	湯本 左衛	安政三十二		140	加賀山 宗純	安政四年	

177	小川	草立	安政六	仙台藩	184	坂本	洋齋	安政六	薩州藩	190	慎	快悦	万延元年	盛岡藩
178	近森	桃溪	安政六	土州藩	185	山口	尚齋	万延元年三月	房州安房郡岡田村	191	相田	只男	万延元年	一ノ関
179	江幡	文虎	安政六	盛岡藩							通稱秀山 幼名只男	入門年二十四		
180	稲垣	周栄	安政六	新発田藩	186	寺崎	良庵	万延元年	新発田藩	192	佐藤	理隠	万延元年	一ノ関
181	桑原	玄斎	安政六	甲府	187	香川	周玄	万延元年	新発田藩	193	井手	宗慶	万延元年	諏訪藩
182	柏木	玄伯	安政六	甲府	188	橋本	孝庵	万延元年	新発田藩	194	上村	春亭	万延元年	因幡藩
183	手塚	元瑞	安政六	津軽藩	189	山科	杏仙	万延元年	宇都宮藩	195	安藤	良斎	万延元年	溝口藩

後記

昭和十六年八月三日に、私は召集令状をうけ、足掛六年間、フィリップ・ラバウル・ブーゲンビル島など、南方の島々を転々とし、玉碎寸前、九死に一生を得て復員した。郷里の倉庫に疎開してあった茶箱を開いたとき、私の留守中に弟有道が購入しておいた、私の知らない医事年表が現われた。即ち中野操先生の『皇国医事大年表』で、昭和十七年二月十一日の発行であった。その昭和十二年四月のところに、「柘植大学に漢方医学講座を設け、木村長久・石原保秀・大塚敬節・矢数道明ら講師に挙げらる」という記事が眼に入り、終りの人名索引のところにも私の名が出ているのを見たとき、戦地でもし玉碎していても、この『皇国医事大年表』に、たとえ一行でも記録されていたのだということに異常の感銘を覚えた。そのとき以来、私は中野操先生を心より敬慕するようになった。昭和三十年四月、京都の総会で発表された「水戸烈公の医学教育と常陸大宮郷校富田玄東の業績」は、中野先生のご希望によって、先生の主宰されている『医譚』第八号に掲載して頂いた。

また昭和四十七年十二月二十日、以後三十年間の年表が追加されて『増補日本医事大年表』が発刊され、筆者は『漢方の臨牀』誌二十巻二号に新刊紹介文を掲載したとき、中野先生よりご懇篤なお便りを頂いた。

このたび日本医史学会の企画で、中野操先生の追悼記念論文の委嘱に接し、『多紀雲従門人録』を選んで、先生の学恩に報いることとした。本稿作成に当り、小林清八郎・小曾戸洋・真柳誠・高橋教子・矢数卿子各氏のご協力を得たことを附記し、感謝の意を表する次第である。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

A List of Wunjyu TAKI's pupils

by Domei YAKAZU

Wunjyu Taki (1834-76), a medical officer in the late Tokugawa era, was the eldest son of Genken Taki, who presided over the Edo Medical School. Recently, a list of Wunjyu's pupils, written by Shindo Fukagawa in the early Showa era (about 1930), was found in the author's library.

On this list, the names, ages, birth places, and other details of 195 pupils are to be found, and these are recorded according to the year of each pupil's entrance to the school, from 1850 to 1860. The existence of this list and its contents have not been reported before.

Accordingly, the present author is publishing this list in its entirety. In addition, the present author reports on the achievements of Godo Ishihara, one of Wunjyu's pupils mentioned in this list.